

## 前編

# オランダを合わせ鏡として日本の農業を見る

～恵まれた環境に安住し  
自らの可能性を見失ってはいないか～

	オランダ※1	日本
面積	41,864km <sup>2</sup> (九州とほぼ同じ)	377,947km <sup>2</sup> (2009年10月現在)※2
人口	1,653万人 (2009年オランダ中央統計局)	12,776万人 (2011年11月概算値)※2
GDP	7,833億ドル (2010年:IMF)	54,588億ドル (2010年:IMF)
一人当たりGDP	47,172ドル (2010年:IMF)	42,783ドル (2010年:IMF)

※1 外務省HPデータによる  
※2 総務省統計局データによる

人は鏡で己の姿を確かめその居住  
いを正し、またその姿で己を語って  
いる。しかし、鏡に映る姿は現実の  
自分ではない。もう一枚の合わせ鏡  
に映る姿で己の実像を見ることがで  
きる。初めて海外を旅した人々に  
わかに愛国者になったり、日本への  
幻滅を感じたりすることが多いの  
は、旅先の外国が合わせ鏡となつて  
日本や己自身を意識させるからだ。  
九州とほぼ同面積という小国なが  
世界2位の農産物輸出。トマトを  
はじめ農産物の収量が多いことでも  
有名な、先進国農業の象徴とも言え  
るオランダ。そのオランダを合わせ  
鏡にして日本の農業を以下数回に分  
けて考えてみたい。

### 日蘭の大きな収量差はなぜ？

筆者は昨年11月にオランダを訪  
ねた。同国の経済・農業・イノベー  
ション省の招待で、それは筆者に  
とって初めてのオランダだった。

オランダ農業のほんの一部を見た  
だけであるが、旅の感想を一言でい  
えば、日本農業は先進国のそれと言  
うに足る技術レベルにはないとい  
う敗北感だ。さらに、保護された安楽  
さの中でチャレンジ精神を失った  
「日本病」とでも言うべき日本の農  
業。そして「精神の鎖国」とも言

うべき精神状態の中にある日本を改  
めて痛感させられたことである。

国際連合食料農業機関 (FAO)  
の統計で我が国とオランダとのトマ  
トや小麦、ジャガイモの平均収量の  
差が大きいことはかねて知ってい  
た。しかし、現地に行くことで、日  
頃、「敗北主義が利権化している日  
本農業」などと言って「負け」を認  
めたくはない筆者といえども、むし  
ろ素直に負けを認めるべきだと思っ  
た。それは気象条件や品種の違いな  
どの理由を語る以前の問題を含めて  
である。

図1を見ていただきたい。これは、  
FAOのデータから日本とオランダ  
の小麦とジャガイモとトマトの10a  
当たり収量を1960年から比較し  
たものである。単位は10a当たり  
換算してある。

まず小麦に関して。2009年  
と比較すると、オランダの10a当  
り平均収量は929kg。日本の平均  
は323kg。農水省の発表による平  
成23年(11年)産小麦の全国平均  
収量は351kgだ。北海道の417kg  
が都府県265kgを引き上げている  
のである。そう言う北海道といえ  
ども400kg台。オランダの平均収  
量の半分にも足りないのである。

ちなみに、世界2位のオランダは  
1位のベルギー(946kg)ととも

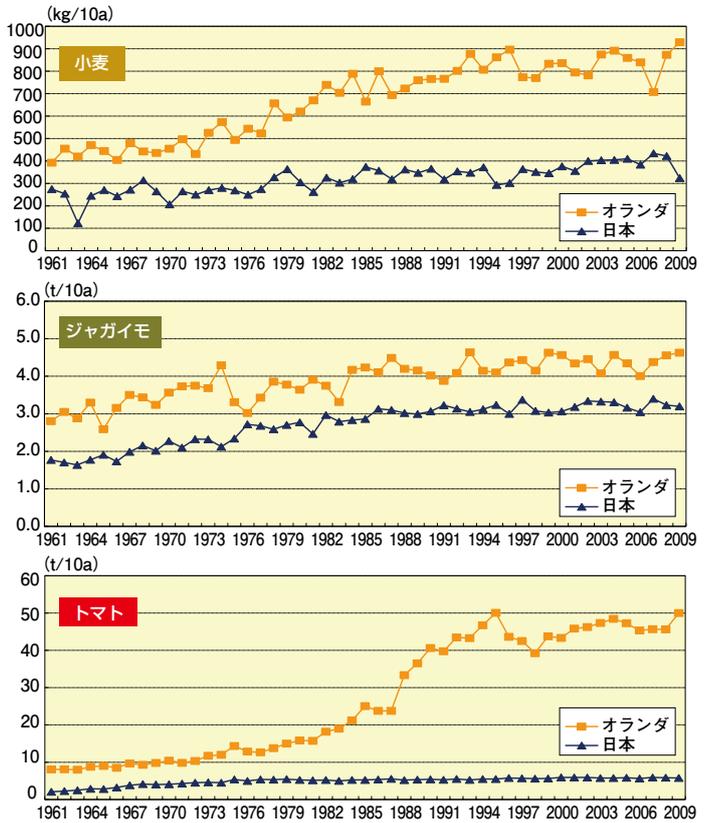


に900kg超で群を抜いて多収であり、それに次いでアイルランド、デンマーク、英国、ドイツ、ニュージーランド、フランスなどの順で700〜800kg台で続き、日本の323kgは42位である。ちなみに米国は日本よりさらに低収量の298kg(51位)だが、米国はオーストラリア(160kg・95位)などとともに灌漑設備が無ければ大幅に減収する砂漠地帯での小麦作である。

オランダの収量は、国土の4分の1が水面下で、16頁右上の写真のようどこに行っても畑と水路の落差

は20〜30cm程度という条件でのものだ。世界一のベルギーもオランダに隣接した「低地」の国だ。にもかかわらずの900kgを越す平均収量なのだ。海面下の農地でもかつては風車で、現在ではポンプによる強制排水をしているとはいえ、高収量の理由はそれだけなのだろうか。多くの本誌読者であれば、畑に自ら暗渠を施工し排水改善に取り組んでいる。それでも、600kgを超えれば取れたなど自慢したくなる気持ちになるのではなからうか。品種の違いや夏の日照や冷涼な気候あるいは土質の

■図1 10a当りの収量の比較 (a:小麦、b:ジャガイモ、c:トマト)



※FAO statistical yearbook 2010のデータより編集部作成

違いなどもあるだろう。北海道の読者の中には1tを越す収量を上げる人もいる。でも、オランダでは全農家の平均が929kgなのだ。

ジャガイモはどうか。2009年のデータによるとオランダは4・6tで1位の米国と42kgの差でトップを競っている。これに対して日本は16位の3・2t。日本でも5tレベルの収量を上げる人もいる。北海道を除けばジャガイモ作りの適地とはいえないことを考えれば、健闘していると言いきるべきなのかもしれない。それにしてもあの水位の高さの中で小麦やジャガイモに限らず、生産している作物の多くが世界ランキングの上位にあるオランダなのだ。

さらにトマトの収量の差をどう考えればよいのだろうか。FAOの統計によれば日本の10a当たりの平均収量は5・7tである。それに対してオランダは50t。日本の10倍近い収量だ。イタリアやフランス、スペインなどの国では調理用やジュース用トマトの栽培が多く、単純な比較はできない。でも、日本のトマトはそれほどほとんどはハウストマトだ。30t程度を取った経験のある読者を筆者は知っているし、50t近く取る人もいると聞いたこともある。しかし、オランダは平均収量が50tなのだ。オランダで聞いた話では70tを越す

収量を上げる農場もあるそうだ。その違いは、16頁右下の写真を見ただけならば想像がつくだろう。写真を撮ったのは11月2日。支柱に巻き付いたトマトの茎の量を見ればいくら多段取りといってもすでに収穫は終わったといつてよい時期だ。それでも葉には何の病気も付いていない。日本にもオランダ型のハウスはたくさん導入されている。でも、そうしたハウスでの収量や作物の管理レベルは見劣りすると言わざるを得ない。その理由はなぜなのか。

競争が強い農業を作る

最初に書いた招待先の組織名を見ればわかるとおり、オランダでは10年に農林水産省と経済産業省は省庁再編され一つの組織になっている。さらに、農家に技術指導をする普及事業も廃止されているのだ。

受け入れの責任者であり、オランダ農業についてのレクチャーもしてくださった経済・農業・イノベーション省のMarcel Vermeulen氏に筆者は尋ねてみた。省庁の再編や普及員制度の廃止は政治的な問題にはならなかったのかと。その答えは、「若干の議論はあったが、大問題というほどのものではなかった。むしろそれがオランダ農業のイノベーションに



つながったのです」だった。さらに、無料の官製普及事業の廃止によって民間のコンサルタントの活躍の場が広がった。コンサルタントは経営効果を上げられなければクライアントを失うわけであり、コンサルタント間の競争があり、それが農場の技術レベルを向上させたと話す。その結果、顧客の評価を左右する天敵その他の技術で農業の使用比率を下げるI P M比率が95%のレベルに達するような農場も増えたという。

06年の統計では、平均的なハウスのサイズは1・2 haであり、100 haを超すハウスを持つ農場が69社あり、50〜100 ha規模でも215社に達し、総企業数は8300社である。1980年には温室の平均的サ



オランダは国中が水の  
上に浮いているようだ

イズは0・6 haに過ぎず、農場の数は1万5700社もあったそうだ。農場規模が拡大されるとともに、技術レベルの向上や生産コストを下げることでできなかった約半分の農場は淘汰されたのである。

あえて弱い者を守ることはせず、強い者というよりマーケットの競争に比べられる農場が残り、そしてそのことによってオランダの園芸農業の地位が守られているのである。

オランダは、古くはローマ帝国、スペイン、フランスの支配を受け、第二次世界大戦でもドイツに占領された過去を持つ。強国に囲まれた小国であればこそ、東インド会社を含めた商人の国として成長し、さらに干拓によって国土を自ら作ってきたという歴史があればこそ、国民が同じ目的に向かって合意を作り上げていく精神風土が培われたのだろう。人口も1650万人しかおらず、であればこそ国外にマーケットを求めざるを得ない。農業と加工業が一体化することを当然と考え、世界のマーケットの中で勝ち残らねば未来のないオランダ農業。技術だけではない農業の産業化やイノベーションはそんな文化・歴史的背景を持っているのだから。

それに対する日本。1億人の市場規模、世界最高のマーケットの中に

ある農業。一方、農村優先の農業政策が農業の産業化を阻んでいる。保護された生温い環境ゆえに農業経営者階層を含めて、日本の中で世間知らずに安住しているとは言えないだろうか。これがオランダを合わせ鏡にした筆者が見た日本農業の姿だ。

小麦でもトマトでも世界の収量ランキングで上位を占めるのはヨーロッパの国々だ。もとより園芸分野では政府やEUからの補助金は高い。EUは日本より補助金の水準が高いなどと言う人がいるが、面積当たりの額で言えば、日本の10分の1のレベルだ。平均収量の高さを見ると、日本での補助金目当ての麦や大豆の捨て作りや補助金の受け皿としての集落営農組織など有り得ようもない。日本の平均収量を下げているのも、数の上で大部分を占める趣味レベルの農家が勘定に入るからでもある。

多収を語ってもそのコストは考えておらず、コメ1俵、トマト1ケース当たりのコストを語れる農家は日本でどれだけいるのだろうか。「連作障害」などと言いつつ、土壌分析



収穫の終わったトマトにも病気が付いていない

に基づく単肥の設計をする農家はわずかだ。

日本より反収の低い米国の小麦を紹介したのは、その産地条件と共にそれが米国農業の中でも日本以上に補助金依存度の高い作物だと想像でき、それゆえの収量だと思っただ。その反面で、加工メーカーと一体になった産業化の進むジャガイモでは世界一の米国。第2位のオランダもベルギーやドイツなどの国々も補助金依存ではなくメーカーと一体となった産業化が進んでいる。日本が一定の収量レベルにあるのもカルビーなど食品メーカーによる産業化が進んでいるせいだろう。

我が国の農家は農産物の単価の安さをボヤクのが常だ。でも、オランダや世界との収量差を見れば、日本の農業経営者はまだ自己改革が足りず、安楽椅子に座って己を甘やかしているのではないだろうか(続)。